

# 「とにかく列車を走らせろ」 心が奮い立った新設校での思い出

新潟県 上越市立春日中学校校長 佐藤賢治 SATO KENJI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、佐藤校長が語る。

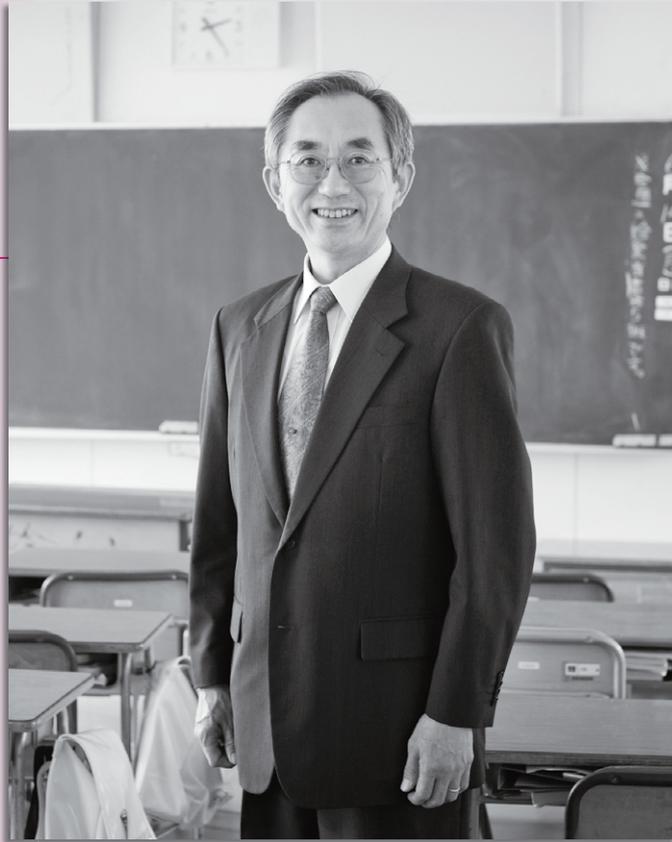
## 新設校での重圧に負けず 教師を一つにした

1983年、31歳の私は新設校の上越市立春日中学校に着任しました。市中心部に位置することもあり地域の期待は高く、「市内でナンバー1の学校にしよう」と意気込んで入学式を迎えたことを覚えています。

その気持ちは他の教師も同様でした。しかし、それぞれに理想とする教育があり、なかなかビジョンが一つにならない。私を含め、どの教師も新設校というプレッシャーから力んでいたのでしょうか。

そうした中で、一人だけ自然体の先生がいました。初代校長の村山和夫先生です。それまでに私が出会った校長はどこか近寄り難い存在でしたが、村山校長は教師や生徒に気さくに話しかけ、誰からも親近感を抱かれる人柄でした。

その村山校長が職員会議で発した一言が今でも忘れられません。「とにかく列車を走らせろ。レールは後から敷けばいい。問題があれば、自分が責任を取るから」村山校長は、校長として他の教師とは比較にならないほど大きな重圧を感じていたはず。しかし、そ



さとう・けんじ 新潟県内の中学校のほか、1991年から3年間、ルーマニアのブカレスト日本人学校に勤務。現在はキャリア教育の研究を進め、2008年度関東ブロック校長会で新潟県代表として研究成果を発表。専門は理科・数学。

### 大学時代

中学生に理科の楽しさを伝えたいと、教師を志す

### 1977(昭和52)

新採として松之山町立松之山中学校(現十日町市立松之山中学校)に赴任

### 1983(昭和58)

新設校の上越市立春日中学校に赴任。村山和夫校長と出会う



春日中学校の卒業アルバムより佐藤先生が紹介された1コマ

### 1991(平成3)

ルーマニアのブカレスト日本人学校に勤務

### 2004(平成16)

柏崎市立松浜中学校に校長として赴任。キャリア教育に出会う

### 2010(平成22)

上越市立春日中学校に校長として赴任

うした素振りは一切見せず、新設校ゆえにゼロからのスタートであることを逆に楽しもうと語りかけ、教師の心を一つにまとめたのでした。

村山校長の言動からは、教師を深く信頼されていることが伝わってきました。家庭訪問で職員室に帰って来るのが23時頃になったとき、驚いたことに村山校長が待っていてくださいました。生徒の状況を話すと、最初に返ってきた言葉は「ありがとう。頑張っているね」。至らぬ点も多かったはずですが、それを指摘するのではなく、まずは認めてくださったことに勇気づけられたのを思い出します。

村山校長は、生徒のことも実によく見ていました。何より感心させられたのが、500人ほどの生徒の名



新設後、最初の卒業式で読み上げられた校長式辞（村山校長の直筆）が今も校長室に大切に保管されている

前をすべて覚えていたこと。そして作業着を着て、子どもと一緒に校庭の草むしりをしながら話を聞くのです。校長先生から名前を呼ばれて話しかけられた生徒は誰もが驚き、そして喜んでいました。そんな姿を見て、子どもと同じ目線で話すことの大切さを学びました。

村山校長のリーダーシップのもと、春日中学校は教師や卒業生の誰もが誇りに感じる学校になりました。それを象徴していたのが校歌斉唱です。歌は口だけでなく、心も開かなくては歌えません。当時の春日中学校では、教師と生徒が共に胸を張って大きな声で歌っていました。

### すべての子どもは 学びに向かう本能を持つ

思いも寄らないことに、2010年度、今度は校長として春日中学校に赴任しました。実は今、春日中学校は生徒指導上の難しさを抱えています。校長として何より心掛けているのは、村山校長のように子どもの心に寄り添うことです。その一心で行っているのが、「Dr.サトケン算数・数学・理科クリニック」。校長室に数学や理科が苦手な子どもを呼び、

## 「校長として何より心掛けるのは 子どもの心に寄り添うこと」



個別に教える試みです。

ある日、問題行動の見られる生徒がたまたま校長室の前に座っていたので「クリニック」に誘いました。最初は嫌々という感じでしたが、いざ教えると次々に理解して、「自分にも出来た!」といった驚きと喜びの入り混じった表情を見せました。すべての子どもは、「学びたい」「分かりたい」という本能を持っていると、私は信じています。教師の働き掛けにより、どのような子どもも大

きく伸びる可能性を秘めている。校長の立場にあるからこそ、その可能性を信じ、支えていきたいのです。

幸いにもかつての教え子が今は保護者となり、その子どもたちが春日中学校に通っています。学校に愛着を持つ保護者の期待と応援があるのは何よりの強みです。定年まで残された時間は3年間。春日中学校の体育館に再び素晴らしい校歌を響き渡らせることが、教師としての最後の使命と感じています。